

第十号

執筆者

33人

@短信

大谷 多加志 新連載

社会福祉法人京都国際社会福祉協会の中で、児童発達支援事業所と研修・研究機能を持つ京都国際社会福祉センターで勤務しています。

今年で10年目。経験値ゼロで始めた仕事が少しずつ形になってきた時に、今回のマガジンへのお誘いをいただきました。思えば、この10年、周りにはチャンスを与え続けてくれる方が本当にたくさんいたと思います。

私の最も重要な仕事の1つである「新版K式発達検査」をめぐる執筆したいと思っています。どうぞよろしく願います。

岡田 隆介

20年以上の付き合いのある友人も私も、60歳半ばで若作りのオッサンである。お互い下戸・甘党で、おしゃべりが大好きだ。同じ時期に児童相談所で育ち、家族療法に興味をもった。面接を楽しくやりたいという臨床のスタイルも似ていると思う。妻と3人の子どもがいて、星座も血液型も近い(?)。

にもかかわらず、講演やワークショップはぜんぜん違う。友人は新鮮な素材を参加者に提供し、煮るなり焼くなりあなたたちが決めなさいというスタイルだ(たぶん)。

家族については語りまくるが、目標や手段についての指図はしない(たぶん)。わたしはレシピを配る。調理してみせる。ひたすら味付けにこだわる。

友人は、形を変えることなく長く人々を惹きつける。変わるのは参加者の方で、それを心底楽しんでいる。私はというと、強迫的に次々とレシピを用意する。パワポにも凝る。疲れる、飽きる。そして、そんな自分を楽しんでいる。真似たり盗んだりしても無理、そう悟ったのは数年前のことだった。

最近、Facebookでも同じだなと思った。友人は、次々に旬の素材を書き込む。素材は投げっぱなし、誰かが食いついても煮るなど焼くなど好きにするとばかり、次の新鮮なネタを投げ込む。わたしは、ときどき人のネタに絡んだりツッコんだりする程度。Facebookにレシピはなじまない、とばかりに…。

竹中 尚文

浄土真宗本願寺派専光寺住職。

今日、朝のニュースが「シリアのアレップでジャーナリストの山本美香さんが死亡しました」と伝えた。私は、「えっ?」と思って友人のカメラマンに電話をした。「そう言えば、あいつらシリアに行っているらしいよ。え〜!」私は夫の佐藤和孝さんの事を思った。彼は30年ほど前にアフガニスタンの紛争の取材をしてから戦争の取材を続けている。彼は自分の死に対して覚悟を決めて仕事をしていたと思う。友人たちはそんな彼のことを「オニ」と呼んだ。当時、私が出会ったカメラマンたちは、自らを決してcombat photographerと言わなかった。そこにある「死」の重さを感じてのことだろうと思った。佐藤さんもあれからいろいろとあって、美香さんに出会った。彼女と一緒にってから、いつも一緒、戦場の取材も二人で出かけた。同じ頃、私も結婚など二度とするまいと思っていたのに今の妻に出会った。私たちも、いつも一緒、仕事をするのも一緒である。だから、佐藤さんが自分の命よりも大切な存在に出会った気持ちがよく解る。彼はよもや美香さんの命が失われるなんて思わなかったろ

う。彼が奥さんを連れて帰ってくる姿を思うに、涙が流れる。

川崎 二三彦

子どもの虹情報研修センターが設立10年を迎え、私はこの地で、いつのまにかその半分の期間を過ごしたことになりました。ということは、単身赴任生活も、はや5年を超えたということになります。

過日、連れ合いが京都からはるばる横浜2Kのアパートにやってきました。かれこれ2年ぶりになるでしょうか。そうすると不思議なもので、私、トイレ掃除をしてみたりスリッパを買い換えてみたり、何となく“接待”気分になるんですね、これが。とはいえ、敵も然るもの引掻くもの、部屋に入った途端、「汚れている!」と、こっちの涙ぐましい努力など鼻にもかけず非難の連続。いきなりガスコンロを磨き始め、挙げ句の果て、ガス台のコーティングが剥がれてしまうのはめに。「おい、剥がれたぞ」「あのね、日頃掃除してないからこんなことになるの」「……」とまあ、こんな調子で夜も更けていくのですが、今回は、翌日から青森観光旅行を予定していました。何しろこの人、何の用もなく掃除するためだけに狭いアパートに出てくるはずもなく、わざわざやって来るには、それなりの収穫が必要です。

振り返ると、この5年間、児童相談所時代には考えられもしないほど温泉巡りをしました。アパートで1泊した後、近場の大



滝温泉天城荘、奥湯河原温泉海石榴、今は倒産したらしい箱根湯本温泉桜庵、熱海温泉山の上ホテル、伊香保温泉香雲館などに出かけ、あるいは浅草芸芸ホールや新宿末廣亭などの寄席も覗いて見ました。横浜港を船で遊覧したりもしたんですからね。時には現地集合、現地解散の旅

行企画も立てました。白骨温泉湯元齋藤旅館、下呂温泉月の あかり、雲仙温泉半水廬、別府温泉郷べっぴ昭和園等々に足を向け、温泉以外にも金沢金城樓や沖縄サザンビーチホテルに出かけました。ついでに書いておくと、娘がいた北京にも足を伸ばしました。都合がよかったのは、休日・夜間に緊急の連絡がないこと。職場から突然呼び出されることなんてあり得ないので、計画を立てやすいんです。

さて、青森はねぶた祭り直前の弘前経由で大鰐温泉星野リゾート界津軽泊。翌日に奥入瀬、十和田湖をまわって青森市内の某ホテルに宿泊すると、最後は日本最大級の縄文集落跡三内丸山遺跡で小旅行の打ち止め。

空港で連れ合いを見送り、私は残ってこの後密かに……、というような良いことがあるといいんですが、残念ながら虹センター職員と合流して青森で仕事と相成りました。という、落ちこぼれ家庭「単身赴任の巻き」のお粗末でした。

鶴谷 圭一

夏休みに沖縄本島の北部にある本部というところに5日間滞在しました。3回ぐらい会っただけの知り合いと一緒に行って、ゲストハウスという一泊 2,500 円の宿で寝泊まりして、知り合いの友だちがやっているビーチハウスで図らずも職場体験！をさせてもらいました。いや、勝手にしてしまいました。

台風が通過したあとの沖縄のビーチは悲惨です。木、家庭ゴミ、海草、訳のわからない瓦礫、石ころなどが打ち上げられ、その撤去に3日かかりました。

お手伝いなので僕らは気楽なのですが、ビーチはウスの人にとっては死活問題。台風2発で潰れる店もあるとか…厳しいです。

3日間の作業が終わって感じたのは、白い砂浜と青い海のステキな沖縄のビーチは、現地の人が汗を流しながら作った作品だということがわかりました。今回は僕もそれに加担したぞ！という充実感をもって昼寝が出来たことは幸せでした。もう一つの収穫は、いっしょに行った「知り合い」

が「友だち」になったことです。

ツルヤシューイチ(原町幼稚園 園長)

<http://www.haramachi-ki.jp>

メール: osakana@haramachi-ki.jp

ツイッター: haramachikinder

河岸 由里子

北海道 かうんせりんぐるうむ かかし主宰 (臨床心理士)

最近歳のせい、ボケて来たのか、いつも何か探しているような気がする。ちょっとどこかに置くと、もう見つからない。車のカギ、携帯、財布などなど。何かをしようとして移動すると、その場まで来て何をしようとしていたのか忘れて、元の場所まで戻ること度々ある。

久しぶりの休みの日、銀行に税金やら何やら支払いに行ったときのこと、入金額を書くのに便利ようと、合計金額を書いた紙をバッグに入れたのにみつからない。キャッシュカードをすぐ使えるようにと財布から出しておいたのにみつからない。ゆっくり探したらどちらもちゃんとあったのだが、番号札をとって準備をしていると、こういう時に限ってすぐ呼ばれる。そうすると焦る。焦れば余計に見つからなくなる。

更に銀行の用事を終えて買い物しようと思ったら、買い物リストが見つからない。全部覚えていればリストは要らないのだが、大抵一つ二つ買い忘れたり、同じものを又買ってしまったりということがある。今回は一つ買い忘れたが、まあ大勢に影響ないのでよしとした。結局買い物リストは家に置き忘れていた。

忘れると言う事は大事なことで、何もかも覚えているのは辛い。嫌なことはなるべく忘れたいものだが、そういう記憶は中々忘れない。記憶の選択というのは出来ないのだ。そして今、電話番号や車のナンバーなど、一度聴いたら忘れなかった筈が、何度聞いても、書いても忘れる。歳をとると言う事は、こうやって少しずつ、今まで出来ていたことが出来なくなって行くのかなあとしみじみ思う。

中村 周平

始まるまではほとんど関心のなかったオリンピック。いざテレビを通して選手の活躍している姿を観ていると目が離せなくなってしまう自分がいました。睡眠時間もいつもより短めに。あらためてスポーツが好きだということを実感した夏の夜でした。4年後のリオオリンピックでは、7人制のラグビーが男女ともに正式種目となります。地球の反対側であるリオデジャネイロとの時差は12時間…果たして寝かせてもらえるのでしょうか。というより地上波での放送はあるのかな。

北村 真也

私塾「アウラ学びの森」

(<http://auranomori.com>) 代表。

私塾「アウラ学びの森」

(<http://auranomori.com>) フリースクール

「知誠館」(<http://tiseikan.com>) 代表。

先日、東北大学の長谷川啓三先生の書かれた『ソリューション・バンク』という本を紹介され一気に読みました。その本の中には、私がかつて学んできたA.アドラー、M.エリクソン、G.ベイトソン、R.バンドラー、J.グリンダー、J.ヘンリー、S.ミニューチン、S.D.シェイザー、I.K.バーク、M.ホワイトの相関関係がブリーフ・セラピーというフレームの中でわかりやすく記されていました。そして最後のページに載せられていた長谷川先生の著作に目を通した瞬間に、20年以上前に名古屋のとある屋台で先生と一緒に「味噌煮込みおでん」を食べた記憶がよみがえってきたのです。当時先生は、少しの間だけ名古屋の椋山女子大におられたことがあり、その時に私は個人的に出会っていたのです。一冊の本を通して、私の学びの世界と現実の世界がどこかつながった感じがした瞬間でもありました。

村本 邦子

この夏はブーケットに行って、仕事ばかりしていた。たくさん原稿を書くつもりで6つも持って行ったが、結局、2つと半分しか終わらなかった。「時間さえあれば」というのが間違いであることを悟ったが、でも、

まあ、「ああでもない、こうでもない」と悶々と思考する贅沢というのも悪くないだろう。なんだかんだ言って、いつになく、のんびりダラダラしていたとは言える。今回で連載を終えるけど、また近いうちに。

荒木 晃子

母の経口摂取がストップしてから8か月。知り合いの医師からは、点滴のみで生命を維持する限界は約2年とも聞いた。横たわる母に、進行性の脳性麻痺の変化は目に見えて明かだ。でも、そうやって、母は生きている。私には、唯一動く左目で愛娘を見つめる母のまなざしが、時に、不思議そうに、また、うれしそうにも映る。おそらく、何かを語りかけたいのだろう、何かを伝えたいのだろうとを感じる時もある。私も、もう一度母の声を、そして、言葉を聞きたい。もし、かなうなら、いま何を感じ、何を思うのか、たずねてみたい。

かなうことのない望みと知りつつ、私は変わらず母に語りかける。いつものように、ただ、日常の出来事を。うれしかったこと、いま頑張っていること、どんな人たちが私を支えてくれているかということ。返事のない対話と、まるで顔を突き合わせながら語るふたりの距離が、現在の母と娘の唯一のコミュニケーションだ。目の前に、息する母をみつめながら、いま、私は、この世で一番母を大切に思っているのだなと、今までもずっとそうだったんだなと、当たり前のことをおもい、そして、それを母に伝える。

そこは、奈良県は信貴山山系に佇む総合病院の一室。母の病室には4つのベッドが並び、4人の高齢者が静かに横たわっている。そのうちのおふたりにご家族が見舞う光景は未だ目にしたことがない。認知症専門内科病棟では、おふたりのように、入院以来家族のだれも訪れるものがない方々も多いと聞いた。きっと、ご本人はさびしい思いをされていることだろう。

母と同室のもう一人の女性には、私が訪れた大半でお会いする高齢の男性がいつも寄り添っている。おそらくご夫婦なのだと思う。隣のベッドでお二人が交わす、意思の疎通ができているとは決して言え

ない会話の中で、時折小耳にはさむ男性の言葉に、先日、深い愛情を感じる機会があった。面会が終わり、病室を去る際男性が奥様にお別れの言葉をかけた。「じゃあね、帰るよ。また来るからね」そう言い一旦病室を後にした後、2度3度再びベッド際に帰ってくることを繰り返す。3度目の「じゃあね」の後、女性が初めて返事した。「忘れ物はなっい?」。男性はうれしそうに満面の笑みを浮かべ、「僕の忘れ物は君だよ」そういいながら部屋を後にした。男性が返った後の病室は、柔らかな空気と穏やかな時間に包まれた。そして、そのとき母は、確かに、私に向かって微笑んでいた。

尾上 明代

今、東京で、恒例の夏の連続セッションの真っ最中です。

いつも違ったテーマを決めて行いますが、5回分のセッション・プログラムを創るのも、実施するのもとてもワクワクして、自分自身もすごく楽しくできる仕事の1つです。今回のテーマは、「心の障害物」を乗り越えて夢を叶える! ~自分自身の根源的な力を確認して~

毎回、少しずつ希望や夢を叶える力をつけていき、最終ワークで、参加者全員の夢を実現するドラマを創ります。

ところで私は今日、流れ星を見て(東京のプラネタリウムで、ですが…)急いで願いごとを言いました。

きっと叶うと思っています!

木村 晃子

わが町には、共生型コミュニティ農園「べこぺこのはたけ」というスペースがある。地元のNPO法人が中心で様々な取り組みを展開しているが、内閣府の「新しい公共」というモデル事業を受け、このスペースで高齢者の就労支援を展開する取り組みをしている。地域の団塊世代の元気高齢者は勿論、要介護者であっても参加できる場所。

春から、企画に携わり、利用者さんをお誘いし、8月初旬に種まきを開始した。ケアマネでありながら、利用者と一緒に地域

の活動に参加していくことの喜び、支援の枠組みを固定しないことで、利用者、家族との関係にもたらされる大きな変化。日々、様々なことを感じ学びの連続。

地域包括ケアが叫ばれる中、関係機関の連携や、ケアチームと利用者のつながりの強化だけにとどまらない。老いに伴い地域とのつながりが弱まっていく高齢者でも、再び地域につながっていけるように、支援展開が必要だと思う。次号からは、そんな地域の実践活動もお伝えしていきたい。

北海道 当別町 普段はケアマネジャーとして高齢者支援をしています。

団遊

8/24に第二子が産まれました。女兒でした。名を「そよ夏」としました。去年、友人が1歳の娘を急病で亡くしました。葬儀で、喪主でもある友人が「私はあなたが産まれて4人になったときに、初めて家族を持てたと思いました。我が家を家族にしてくれてありがとう」と涙ながらにあいさつしたのが、とても印象的でした。

昨晚、病院から戻ったそよ夏が、息子のつなぐと妻と三人で、同じ部屋に寝ていました。その様子を眺めた時に、これまで私たち夫婦の付き添いのような息子が兄になり、2対1だったのが、2対2になったのだと強く思いました。友人のセリフを思い出しながら、彼が言っていたのは、きっとこういう気分なのだろうと思いました。

藤 信子

7月の下旬にコロンビアに行った。シカゴに寄るといので、気温を調べたら32度ということで、京都と変わらないことを確かめた。シカゴというのは、寒い所らしいと勝手に思っていたけれど、夏は暑いらしいということを知った。あんなに大きな湖(私の感覚からいうと海みたい)の傍なのに、何故暑くて寒いのかしらと不思議な感じ。そのシカゴ、そして一泊したマイアミの空港とホテルのエアコンの寒さ(涼しさというべきか)に震え上がった。ここまで冷房を効かせなくてもと言いながら、少し前

の新幹線を思い出した。そう言えばこの頃新幹線は一頃のむやみな寒さではなくなったなと思出した。計画停電が始まるかという関西から出かけて、エネルギーの問題を考えていない(考えなくて良いと思っっているらしい)国なんだと改めて思った。日本も大震災が無ければ、冷やしすぎはないにしても、あまり変わらなかったのかな、とぼんやり考えた。世界は広いのか、いいとは思えないような、よく分からない体験だった。

水野 スウ

とりわけ厳しい今年の夏よ！その暑さにもめげず、クーラーのないわが家(っていっても、今や森みたいにしげった庭木の葉っぱたちの緑エアコンがよく効いて、結構涼しいんだけど)には、夏休みならではの人たちが、今年も出たり入ったり、よく訪ねてきました。

夏休み最初の、紅茶の時間の日めがけてやってきたのは、このコース2回目の、滋賀の子育てグループが母子10人で。家族旅行の行き先をふたたび石川に選んで、2年ぶりに秋田から来てくれた人もいた。その秋田の彼女が、県に申請してくれた出前紅茶の企画が通ったおかげで、私はこの冬、5月に続いてまた秋田に行くことに。

大阪からは、生まれて半年の赤ちゃん連れで、若い夫婦が泊まりがけでやってきた。赤ちゃんの父親と出逢ったのは16年前、彼が19歳の時。不登校の子と学校に行ってる子たちとが、パネラーになっての「学校って何？」というシンポジウムを開こうというオリジナルな企画で、彼はその実行委員長だった。十代の彼らがいつもわが家でその委員会を開いてたことから、不登校だった彼と、今に至る長いつきあいがはじまった、というわけ。

夫婦とも、私たち家族に対して、血によらない「家族」を感じてくれるみたいで、私は、生まれたその子の名づけ親となり、うちの娘は、その子が成長して親に反抗した時の家出先・第一号に指定されたとのこと。

若い彼らの結婚観、家族観、子ども観。

それは彼らが育ったそれぞれの家のとはものすっごく違う。自分たちがそれぞれにしんどかった歳月を、この夫婦はよく語り合い、分析もしていて、子どもはできるかぎり、親が抱え込まずに、社会の中で育てて行きたい、と強く願っているらしい。いわば赤の他人である私が、赤ちゃんのゴッドマザーになったわけも、きっとそのあたりにあるのだろうな。「紅茶の時間」の家主。石川県在住。

E-mail :sue-miz@nifty.com

「紅茶の時間」URL

<http://www12.ocn.ne.jp/~mimia/sue.htm>

山本 菜穂子

誰かが誰かにいじめられ、いじめられた誰かが誰かをいじめ、またその誰かが誰かを・・・そうしていくつもの連鎖の先で事件になる。他人事じゃない。その連鎖の中に自分もいるかもしれないって考える想像力が私たち誰にでも必要な気がする。事件で見えてきた加害者と被害者の関係を云々することに意味がないとは思わない。でもその場面の加害者を罰したら、全てが解決するような気になるのは、ちょっと違うんじゃないかとずっと思ってきた。だから、ほほえみプロデュースを始めたようなもの。私自身は誰かを虐げていないか。私は誰かの良いところに気づけているか。それをちゃんと伝えているか。みんなで自分にできることから始めませんか。

すぐできる改善策と同時に、長くかかっても根本に手をつけよう。

罰則で締め付けたところから、また次の鬱屈した思いのはけ口が、いじめになってこぼれていく、そんな気がするの。

さ、我が村、田舎館村の今年の田んぼアートも素敵ですよ。

<http://www.vill.inakadate.lg.jp/docs/2012060600012/>

早樫 一男

夏バテという言葉には無縁のように、この夏も、予定通りのスケジュールをこなすことができました。健康な体であることに何よりも感謝です。

連載している「家族造形法」に関しては、定例の事例検討会や研究会だけでなく、単発のワークショップなどでも紹介する機会がありました(その内容については、今回、紹介しています)。家族造形法を通して、さまざまな家族や人々に出会えることが元気の素になっているのかもしれない。秋もこのペースで乗り切りたいと思っています！

西川 友里

いくつかの学校で、福祉系対人援助職の養成に関わっている者です。

この原稿の締め切りは8月下旬、夏休みの真っ最中。夏休みは実習指導の季節。今年は始めて何う施設が多く、新しい施設や職員さんとのたくさんのお会いがありました。

特に昨今は、施設の経営、運営に関する勉強をさせていただける施設が増えていきます。改めて、私も経営の勉強をしなければいけないと思い、経営学の本を読んだり、勉強をしておいたりしています。

そこで気付いたのですが、経営の入門書、福祉の入門書は沢山ありますが、福祉経営の入門書というのとはとても少ない。「福祉サービスの組織と経営」という科目が社会福祉士国家試験の科目になりましたので、その教科書を読んではいますが...どうもピンとこない。

こんな時、施設の事務長さんとお話をさせていただくと、とても勉強になります。特に、一般企業でのご経験のある事務の方は、視野が広くて、お話ししてとても面白い！数回前の記事にも書きましたが、やっぱり全然違う分野から社会福祉分野に来た人からは、なんらかの独特なパワーを感じるなぁと思います。

中島 弘美

個人開業のカウンセリングオフィスを大阪でしています。

私が生まれたのは大阪市内で、隣接する兵庫県の尼崎というところで育ち、ずっと人口密度の高いところで暮らしてきました。といっても自宅の周りには田んぼも畑もあったので、都市部で暮らしているとい

う感覚はそれほどなかったのです。が、私はどうもコテコテの大阪人らしいということを感じています。

それは、あるテレビ番組の影響です。その番組はさまざまな県や地域のしきたりや習慣を取り上げて、おもしろおかしく他県と比較する内容です。大阪や関西の話題をみていると、そんなこと常識で当たり前かと思っていたことが次々と放映され、それって大阪だけのことかと気づかされるのがたびたびあります。

最近、違いを知って驚いたのは「喫茶店はおしゃべりをするための空間」と思っていたことです。それは大阪人だけで、本来、喫茶店は、静かにお茶を飲んで本を読んだりして、くつろぐ場所らしいです。大阪人の私は、友だちといっしょに楽しくおしゃべりする場所だと思っていました。おしゃべりしたいからお店に入るのだから、仕方なくついでに飲み物を注文することもあり、あくまでもメインはおしゃべり。なぜなら、しゃべることがなによりも重要だからです。

そういえば、大阪から遠く離れて自然豊かな観光地を訪れると、みんな静かだなあと思うことが多く、お店の人は、もちろん親切に対応してくれて、押しつけがましいことは全くありません。ただ周りの人は、あまり話さずに食事をしている気がします。旅行のあと大阪にもどってきてわかるのは、やはりおしゃべりが多くて、にぎやかなことです。もうちょっとそのあたりを自覚せなあかなあ～。

千葉 晃央

救命救急講習を受けた。初めてではない。前回とは AED の説明、胸部圧迫、人工呼吸のやり方が少し変更になっていた。

それよりも印象的だったのは講師の救命救急士の方がはなす、現場で起こったこと、体験された話。なかでも、阪神淡路大震災に派遣されて経験したこと、東日本大震災に派遣を送っている立場から聞こえてくる話。予定終了時刻のころ、もう少しだけ時間が欲しいとおっしゃて、受講者への期待を語られた。あの震災のよう

な事態や誰かが倒れているという場面に遭遇したら、是非今日習ったことを一生懸命してください。

そして最後は、京都市の平均救急車到着時間 6 分間を 6 人チームで救命処置をしながら待つというシュミレーション。私のチームは、実際に「あの日」を経験したメンバー。実際に救急車を待つ時間経験したメンバー。そして、朝「おはようございます！」とあいさつを交わした同僚が、翌日には棺の中であったことを経験したメンバー。あの時も、もしかしたら、こうしていたら助かったかもしれない。そうよぎりながら、でも決して口には出さず、黙々と取り組んだ。皆が思っているのは言うまでもない。

「千葉さんの原動力は何ですか？」... あの時、後輩が流した涙が忘れられへんねん。20 代の後輩がこんなはやくに職場でこんな経験していいの？自分が中途半端な仕事をしていたからじゃないの？自分が何かしていたら、あんなこと防げたんじゃないの？自分ができると、気づいていることがあれば、必ず取組む。こんな原動力は、きかれても毎回話せないよ。

三野 宏治

群馬県高崎市は暑いのです。最高気温日本一の座を争う(争わないでいただきたいのです)熊谷市や館林市が近いといえればご理解いただけるかもしれませんが。最高気温 38 度という日も珍しくありませんでした。ただ、風通しの良い芝生の上の百葉箱で観測された最高気温などあてにはならないのです。風がなくしかも 2 階のアパートなどでは 40 度を超えることなど普通のこと。車の車外温度計で 42 度という表示を見ました。そういえば秋田にいたことは - 20 度という表示を見たっけ。「気温差 62 度かあ。車大丈夫か？」と思いながら、「いやいや私たちこそ大丈夫か」と自分でじぶんをつっこむ土曜日の午後 2 時なのでした。

浦田雅夫

9 月 22 日から 23 日、京都造形芸術大

学 学園祭にて、京都ほっとはあとセンターほかのみなさんと協働して、障がい者施設のオリジナル商品を販売します。ぜひ、お立ち寄りください。

<http://www.kyoto-art.ac.jp/>

中村 正

いつも夏には家族と旅行にでかけているが、こしはお盆を入れて十日間の休みがとれたので連れ合いと二人だけでデンマークにいった。コペンハーゲンにすべて滞在した。一つところに拠点をもち郊外もいれてあちこち歩いた。普段とかかわらずカフェにも入り、おしゃべりをする時間をつくった。急がない旅にした。連れ合いは日本語教師をしているので世界各地に教え子がいる。ここにもいて、彼は王立劇場で働いているので舞台裏など入れないところへと案内してもらったりもした。空港から 3 つ目の駅がコペンハーゲン中央駅でアクセスはよい。その前には荘厳なつくりのコペンハーゲン市役所庁舎がある。大きな広場があり、ちょうどゲイやレズビアンやセクシャルマイノリティのプライドコンサートが開催されていた。やたらと同性同士のカップルがめだつた。夜遅くまで大賑わいだった。かつて、サンフランシスコのカストロ地域(ゲイ&レズビアンのコミュニティ)にいたこともあり、こうした志向には多様性への賛美があるので、有色人種の私としても暮らしやすい、安心できたことも思いだし、連れ合いともそんな話をして、レインボーフラッグはためく偶然のコンサートを楽しんだ。今回の内容にしたソーシャル・ナラティブやソーシャル・ドキュメンタリーのコンテンツともなる話である。そのコペンハーゲンでは、セグウェイという電動立ち乗り式自転車のような新種の乗り物で街を疾走するというツアーを連れ合いがみつけてきて参加した。とても快適だった。その模様がツアー会社の HP から YouTube にアップされている。お暇な方は末尾に記したサイトからどうぞ。美しいコペンハーゲンの街の様子がわかる。どうでもいいことだが、そこに映っている一番後が私でその前の青い服の女性が連れ合いだ。そしてこの様子からわかるように

デンマークは歩道と車道と自転車道が見事に整備されている。このセグウェイは自転車道を走る。街には自転車があふれている。エコな街である。それには理由がある。自動車メーカーがないのだ。隣国からBMWやVOLVOがどんどん入ってくるのを防ぐために高い関税をとることにしたという。エコノミーとエコロジーはやはり両輪のようだ。最高気温24度くらいの快適な休暇だった。さて、また締め切りと格闘し、講演や研修や仕事にでかけるか。

<http://www.youtube.com/embed/4flWsGKBbnA>

サトウタツヤ

短信に毎回毎回締め切りのことを書くのも気が引ける。前号の編集委員長の編集後記に、締め切りのことをしっかり書かれてしまったので、今回は締め切りに遅れないようにしようと思ったりもしていた。ところが、8/25が締め切りだというメールがない。「あれ？ 催促がないな？ もしかして、9/25だけ？」などと考えてしまうところが大问题。8月20日過ぎになって催促がきた。編集委員長のもとに「催促がきてないけど」という問い合わせが相次いだそうである。まさに心がけの違いというべきか。催促がないから、きっと締め切りが延びたんだろう、なんてことは誰も思わないらしいのである。かくして、今回も「あと二人だけですよ」という催促をもらうことになった。

数日遅れなんて、主観的には締め切りを守っているつもりなのですが……(あくまで本人基準ですが)。これまた言い訳ですが、本題に入るまでに色々書くので疲れてしまう、というのが私の欠点。

今回から福島について書いていきますが、なぜ福島のことを書くのか、なぜ行ったのか、を書くだけで、疲れてしまっている体たらく。まあ、これも自分のスタイルだと思ってあきらめるしかないですが。

大野 睦

家の周りにはいつもカニがいて軒下にハチが巣を作りました。そんな夏は台風がよく来る。

先人から教えてもらった通り、今年は台風の当たり年のようです。

ネイチャーガイド 有限会社ネイティブビジョン 代表取締役 屋久島青年会議所 副理事長 BLOG やくしまに暮らして <http://mutsumi-ohno.seesaa.net/>

坊 隆史

企業内の心理職をしているということもあり、経営の観点からの研修や管理職に対して研修をする機会が増えてきた。経営に直結する立場の方々と話していると、対人援助職者と違う話題で盛り上がるのができ、とても新鮮で楽しい。特にお金に関する考え方は、非常にシビアで勉強になる。産業分野に対人援助が貢献できることも多々あると感じる。どのように実践に活かすかを模索している今日この頃である。

松本 健輔

カウンセリングルームHummingBird 主宰 <http://www.hummingbird-cr.com>

今月、偶然に婚活のセミナーの依頼が複数あった。結婚相談所を離れ、夫婦カウンセリングに身を置いて、婚活というものがまた違って見えてきている。婚活の現場で相談を受けるから見えるもの、そこから離れて、結婚後の夫婦の相談から見えるもの。それを統合してセミナーでどう表現し、より援助としてクオリティーの高い物を作り上げていくか。そして、その結果、幸せな結婚を作り上げるお手伝いになる。そう考えていると今からワクワクしてくる。

団 士郎

8月23日に三人目が、27日に四人目の孫が生まれた。母子共に元気らしい。二人のお母さん共に暑いときにご苦労様。長男と次男がそれぞれ、二人ずつの子の親になってくれた。

私は自分の子育てに、けっして熱心だったわけではないが、子どもは大好きだったので、親になって、家族を営むのは楽しいことだと思いつけてきた。そして近年、ますます家族があることの喜びを実感している。

あれやこれや、いろんな仕事をして、我ながら良くやっていると思う。でも、私が親として役割を果たし、お爺ちゃんになっている事以上に、嬉しいと思うことはない。

これは資格や才能を云々しなくても、誰にも可能なことだと思う。そこがとても良いと思うのだ。

ただ一方で、巡り合わせに左右されることも大きい。正しいことも正しくないことも、運も不運も含まれて日常は成立している。だからあらゆる事を、心を込めて行わなければならない。

「明日、地球が亡ぶとしても、私は今日、リンゴの木を植える」

何処で出会った言葉だったか忘れたが、私はそう思い続けていることで、運を貰っている人間のような。孫達は人類の未来だ。本当にそう思う。

お知らせ youtubeで「木陰の物語」がアニメ化されたものを順次アップすることになりました。今まで、紙芝居版の「好きになる力」一本でしたが、いま、アニメ版第一弾「歩道で」、第二弾「花嫁」を見ることができます。是非、ご覧下さい。ホンブロック 歩道で <http://p.tl/v-sC>

岡崎 正明

先日プロ野球観戦に友人らと行った時のこと。

にぎやかな外野席。私たちもメガホンを押さ、大きな声で声援を送っていた。

すると、前の座席の苦虫を噛みつぶしたような顔したオジサンが振り向き、私の友人に何かしらボソボソと話しかけた。

友人は神妙な顔でうなずいた。私が小声で「どうした？」とたずねると「うるさいから静かにしてくれて……」と。

おいおい。ここはお寺でもなければ、夜の住宅街でもない。ましてや周囲は大騒ぎ。こいつ1人を黙らせたところで、静寂がおとずれるとはとても思えない。

思わず「だったら家のテレビで見られたらどうですか」とお伝えしたくなったが、トラブルになっても面白くないのでやめておいた。そのかわり以前にも増して大声で声援を送ったが。

相談の仕事をしていても、こんな首をか
しげたくなるような発言を聞く場面がよくあ
る。本人の選択で当然起こりそうな結果
が出ているのに、それに納得ができなくて
怒ったり、「なんでこんなことに…」と頭を
抱えるパターンだ。

行動選択のクセかシステムの仕業か。
様々な要因があってのことだろうが、思わ
ず「そりゃそうなるわなフツー！」とツッコミ
たくなってしまふ。

しかし普通にツッコんでも自分のボケに
気付かない人が多い。おそらく狙ってやっ
てないからか。となると「そうそう。外野席
では口バクで音を立てずに応援…って、
パントマイムかっ」ぐらいのノリツッコミが
必要なかもしれない。

牛若 孝治

先日、といってもマガジン初連載の前後
になるが、夕方、帰宅するためにバスに
乗った。すると、60代と思われる男性が、
空席を教えてくれた。そこまではよかった
のだが、男性との次のような会話に、私は
わが耳を疑った。

男性:私は定年退職して、今、介護職を
目指して勉強しています。

私:そうですか。では、あなたがもし何か
の病気や怪我で、介護を必要としなけれ
ばならなくなったとき、自分ならどんな介
護を受けたいか考えたことがありますか？

男性:いや。そんなこと考えたことない。
僕は定年退職したのだから、これからは
なにかいいことしたいと思って、介護の勉
強してるんですよ。

私:いいことしたいのだったら、まずは自
分がどんな介護受けたいか考えてみたほ
うがいいですね。

私はこの手の会話をするたびに、一石
を投じたくなる。この人たちは、本当に介
護職に尽きたいのではなく、ただ自己の
ために「いいことしたい」だけなのだ。しか
し非介護者は、そのような自己本位的な
介護者に介護してもらおうとは思っていな
い。本当に介護職を目指しているなら、
「もし自分だったらどんな介護を受けたい
か」と考えることが必要である。

袴田 洋子

8月2日に、飼い猫を亡くしました。リン
パ腫という癌でした。14歳と4カ月、人間
で言えば74歳くらいです。

7月に入り急に状態が悪くなり、抗がん剤
治療の効果が得られず、あつという間でし
た。1か月という短い闘病・介護期間でし
たが、色々なことを思いました。

何より「病気、治したいから、病院に行く
ね」と、猫が思うわけないところで、病院に
連れていくことの罪悪感。「自己決定」を
伴わない援助の居心地の悪さを、存分に
味わいました。

乾 明紀

今回で3回目の投稿となります。懇意
にしている方に、校正を兼ねて事前に読
んでもらったのですが、その方から、「原
稿になると、急に控え目な人格になります
ね」と言われました。今日、恩師に別件で
「論文でもっと主張しなきゃ！」って言われ
ました。逆に言えば、原稿より実践の方が
もっと過激だということなんですよ。や
んちゃって反省文ばかり書いてきた訳じ
ゃないのにな～。

國友 万裕

今日(8月13日)、原稿を送りました。僕
はせっかちですし、早くに仕事はすませて
しまわないと気が済まないの、原稿を出
すのも、いつも一番乗りだそうです。

その後、ピンポンがなって、アマゾンで
注文したばかりのDVDがもう届いたみた
いでした。買ったDVDは「燃えよ、ドラゴ
ン」。『フライ、ダディ、フライ』で、主人公の
おっさんが、この映画のDVDを買う場面
があって、つい真似して衝動買いしてしま
ったのです。この頃、僕はどういう心境の
変化が起きたのか、男っぽくなりたくてた
まりません(笑)。元々は男っぽいこと大嫌
いで、意地でも男っぽいことはしたくなくて、
だから結婚したり、女性と付き合ったりす
るのも嫌だったんですよ。

それが、これだけ年とともに変化するな
んて、自分でも不思議です。去年出版した
『マッチョになりたい!?!』(彩流社)は、お
かげさまで文芸年鑑にも紹介されて、
色々な先生に誉めてもらって、内容的に

は自信作です。しかし、如何せん、あまり
売れていません。学術的な内容なので、
インテリの先生たちからは評価してもらえ
ただけど、一般人にはちょっと難しい
ということだったみたいです。

次はもっと一般向けに男性ジェンダー
の本を書きたいと思っています。今、マッ
チョな友達に出会ってトレーニング中であ
るので、この経過をエッセイ風につづつ
て、『マッチョになった!』というのはどうか
なあと考えています(笑)。でもマッチョな
ボディになるのには1年ぐらいはかかるで
しょうねー。そうだなあ。もし、そういう身体
になれたら、思い切って、自分の裸の写
真を本に出してもいいかなあなんて、面白
がって想像したりしています(誰も見たが
らないか、笑)。そのためには、とりあえず、
マッチョにならなくては!!! もしなれな
かった場合は、『マッチョになれなかつ
た。。。』という本でも出しましょうか(笑)。

マンガ プレゼントのお知らせ

昨年に続いて、被災地や避難地域に暮
らす御家族に向けて、被災復興支援の小
冊子「木陰の物語 追憶の一步」110
頁を製作しました。ご希望の方は140円
切手を貼った返信用封筒(定形外)に住
所氏名記入の上、対人援助学マガジン編
集部 仕事場D・A・N(巻末に表示)にお
申し込み下さい。

